

# 六中だより

## 「短所を長所に」

校長 佐藤 光宏

師走を迎え、校内には冷たい空気の中にも、一年の締めくくりに向けて真剣に様々なことに取り組む生徒たちの姿が見られます。2学期も残りわずかとなりましたが、学習面・生活面ともに、生徒一人一人の成長を感じています。

さて、三者面談期間を活用して3年生の面接練習を実施しています。一人15分ほどの短い時間ですが、私にとって3年生一人一人と対話できる貴重な時間です。面接で気づいたことは各自にフィードバックしていますが、“自分の言葉”で高校生活への目標や抱負を一生懸命伝えてくれる姿は、面接官である私の心に響くものがあります。多少言い間違えたり言葉に詰まったりしても、高校生活への意欲や前向きさは十分に伝わってきます。そういう意味では、暗記した通りに機械的に応答したり、うまく上手に答えようと意識し過ぎたりしないことがむしろ大切だと思います。

先日、ある3年生との面接練習でこんなやり取りがありました。私が「あなたの長所と短所は何ですか」と聞いたところ、その生徒はこう答えました。「私の短所は自分に自信がもてなくて不安になることです…」、少し間を置いて、この生徒はこう付け加えました。「でも、自分に自信がもてるようになるために、高校では新しいことに進んでチャレンジしてあきらめずに努力し続けたいと思っています」。私はこの言葉を聞いてとてもうれしくなりました。自分の短所を見つめることができるのは、成長できる人だと思っています。むしろ、短所を素直に受け止めることができれば、短所を長所に変えられるのではないかでしょうか。自信過剰な人はすべてではないかもしれません、心に隙や慢心が生まれやすいと思います。自分に満足してしまうと進歩や成長が止まります。いつも「足りない」という気持ちを持ち続ける人は、必ず成長していくでしょう。六中生には、そんな気持ちのもてる生徒にぜひ育ってほしいと願っています。

### ◆12月の生活目標

#### 礼儀正しい生活態度を身に付けよう

- ・服装・挨拶・清掃・授業態度
- 1年の締めくくりに身も心も整理整頓!



## ◆デフリンピック観戦

11月19日(水)、2年生は東京2025デフリンピックのバドミントン競技を観戦しました。デフスポーツは、聴覚等に障害のある選手が、音などに頼らず視覚的な合図などを用いて行う競技です。聴覚障害により、情報量の制限やバランス感覚の課題など、練習や試合で不利な状況があります。それでも選手たちは高度な技術と集中力で試合に臨み、迫力あるプレーを見せていました。生徒たちはその姿に感動し、手話を使って応援するなど、積極的に声援を送りました。今回の観戦や、9月に実施した1年生のデファーストリート訪問授業を通じて、生徒たちが多様性を理解し、共生社会を築く力を育んでいくことを願っています。



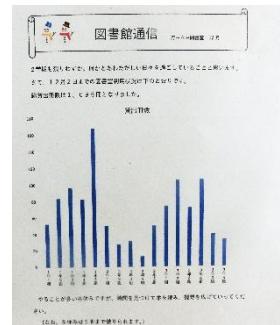
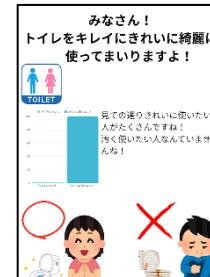
## ◆人権作文

本校では、1、2年生に夏休みの課題として、人権作文に取り組み、提出された作品を人権作文コンクールに出品しています。そうした中で、本校の生徒が学校代表として、府中市の人権作文発表会で朗読をしました。また、その作品は全国人権作文コンクール東京都大会に出品され、応募総数33000点を越える作品の中から、特別優秀賞を受賞しました。発表した本文を最後のページに掲載していますので、是非ともご一読ください。

## ◆生徒会の活動

12月13日(土)本校の生徒会役員が、府中市教育委員会が開催した「生徒会リーダー研修」に参加し、本校の取組を発表しました。他校の取組に刺激を受けた生徒会役員の更なる活躍に期待しています。

また、各専門委員会は朝読書や施設の利用について呼びかけをしています。生徒一人一人が、学校の自治について主体的に考え、自ら生活しやすい環境を作っていくこと期待しています。



## ◆「思いやり」の実現

11月26日の給食の準備において、食缶を倒してしまい、おかずがこぼれてしまつたということがありました。おかずなしになりそうなところ、校内放送で「余ったおかずを持ってきてほしい」とのアナウンスがながれると、直ぐに幾つものクラスが、食缶を持ってくれました。最終的にこぼしてしまったクラス全員にしっかりとおかずが配膳されて、誰もが笑顔で給食の時間を過ごしていました。

本校では「信頼と思いやり」をスローガンとしていますが、この日の生徒たちは「思いやり」を行動で示してくれました。これからも「思いやり」の輪が広がっていくことを願っています。

**12月29日(月)～1月5日(月)まで学校は休業日となります。  
教職員は原則勤務しておりますので、ご注意ください。**

妹が教えてくれたこと

「障害を持っている方には親切にしなければいけません。」「困っている人は助けてあげましょう。」

いつ誰に教えてもらつたかは思い出せない。もしかするといつの間にか刷り込まれた「常識」なのかも知れない。頭では分かっているのに、どこか外国のニュースを聞いているような自分とは遠い世界の話のように思っていた。

僕には五歳年下の妹がいる。今まで一度もケンカなんてしたことがない、一緒にゲームをして遊んだりもする。

自分で言うのもちよつと恥ずかしいが、とても仲がいいと思う。なんと言つても妹の名付け親、いや名付け兄は僕だ。とてもかわいく自慢の妹だ。

ある日僕は、妹の事で話があると両親に呼ばれた。ちょうど妹が一年生になる直前で、僕と同じ小学校に通うので「よろしくね。」とか言われるんだろうなと思いつながら軽い足取りでリビングに行くと、僕が想像もしていかつた真剣な表情の両親がいた。両親は僕に、妹は「自閉スペクトラム症」という発達障害を持っていて、僕と同じ小学校に通うけれど、普通学級には通わずに、特別支援学級である「仲よし学級」に通うことや、妹は人が多い場所が苦手で、視覚優位といって、ほかの人よりも目かららはいる情報が優先されてしまうことなど妹の特性について教えてくれた。

僕が今まで外国のニュースのように感じていた遠い世界は僕のすぐ隣にあったのだ。

それから僕はネットやユーチュープなどで発達障害についていろいろ調べた。少しでも妹の事を理解してあげたかったし、妹が発達障害だと全く気付かなかつたから、もしかすると僕の周りに、他にも障害で本当は助けや理解を必要としているのに、気が付いてもらえない人がいるかもしれないからだ。

妹が小学校に入学してしばらく経った全校朝会。僕が今でも思い出したくない記憶。その日の朝会では、妹は終始大きな声で泣いていた。きっと人が多い場所で不安になつているのだと僕は思った。僕はすぐにでも妹の隣に行つて、大丈夫だよ、怖くないよと言ってあげたかったが、朝会中なので移動することができず、自分の不甲斐なさを感じていた。その時、僕の耳には信じられない言葉がいくつも飛んできた。

「うるさいな、外に出せよ。」「なにあの子泣いてるの。」「なにあいつやばくない。」など耳をふさぎたくなるような、ナイフのような言葉だった。僕は心臓を掴まれているような嫌な気分になつた。更にふつぶつと怒りが込み上げてきた。妹は泣き虫なくせに誰かが泣いていると必ず背中をさすりに行く心が優しい子なんだ。お前に何が分かるんだ、と怒鳴つてやりたかった。でも僕にはそれはできなかつた。妹の泣き声と心無い言葉だけが僕の心を支配した。

その日の朝会は何の話だったか覚えてない。

その日の夜、妹に向けられた酷い言葉について考えた。その結果「きっとみんな妹のことを、障害の事を知らないからあんな言葉が出てきたんだ。」という結論に達した。だから僕はこの作文でみんなに発達障害の事を少しでも知つてほしい。

発達障害の特性は、個人によつて様々である。そして見た目では発達障害かどうかが分かりにくい。だから周囲や社会から理解されにくい。でも特性は欠点ではないという事をまずは知つてほしい。見る角度を変えればそれが長所になる。妹は泣き虫で人が多い所は苦手という特性があるが、その分周りの泣いている子や不安そうな子のことをいち早く察知して、励ますことができる。僕は、これは妹の特性ではなく、チャームポイントだと思っていい。

次はアンコンシャス・バイアスについてだ。これは「無意識の偏見」ともいい、障害者だから何を考えているか分からぬ等、相手を障害者だと理解した上で、当事者が無意識におこしてしまつ偏見の事である。無意識というのはある意味、わざとよりも残酷で厄介だと思う。だからみんなには、人のできない事を見つけるのではなく、できる事、良い所を見つけてほしい。みんなが知つているエジソンやアインシュタインも発達障害だったのではないかと言われている。この偉人達が歴史に名を残しているのは、自身や周りが出来ない事を見つけたり指摘したのではなく、出来る事を見つけ続けた結果なのではないかと僕は考えている。

だからみんなにも人の良い所を見つけ続けてほしい。

妹は僕にたくさんの事を教えてくれる。それは勉強や知識とかよりも、もっと大切なことだ。だから僕も妹から教えてもらつた事をもっとみんなに教えていきたい。

いつか当たり前に理解してもらえる日を目指して。